

# 世界の農業機械・資材トレンド

ヨーロッパの農業機械テストの権威、ドイツ「profi」誌に掲載された世界の農業機械情報。

## 野菜への衝撃を減らしたハーベスタ From Australia

クイーンズランド州ロッキヤー・バレー地方「コアラ農場」を経営するアンソニー・スタートツ氏が同僚のジャミー・バックル氏と共同で何カ月もかけこの低衝撃ハーベスタの微調整を行った。同農場では、いくつも農業機械を使っているが、同機はいまやその筆頭の地位を占めるまでになっている。

さらに作物を引き上げるのは、従来のベルト式コンベアではなく、リフトの上にある円形の揺りかご。これが収穫したレタスをひとつずつ「さばいて」いく。アンソニー・スタートツ氏は「以前のベルト搬送システムでは、カッタが収穫したレタスをコンテナに投げかけるように搬送していたが、このシステムならレタスを傷付けることがない」と説明する。

## 泥炭採掘のプロフェッショナル From Finland

ジュシラ氏が採掘作業に用いるのが、トラクタ36台と作業員53人だ。使用されるトラクタの内訳は、ニューホランドが10台とヴァルトラが26台となっている。



フィンランドの泥炭資源は、900万haの土地に700億m<sup>3</sup>の量があるとされる。それに対し、採掘請負業者ベトリ・ジュリア氏の担当用地は「わずか」1100haに過ぎない。

## Mr Versatility displays his wares



オランダのメーカー、ブレド社が油圧駆動式機材運搬車「VT3936」を売り出している。この車のボンネットには出力286Kw/390hpのエンジンが収まっている。駆動源となるこのドイツ社製「BV6M1015C」エンジンは、最大トルクが1940Nm/1,400

## 性能を発揮する万能運搬車 From Netherlands

rpm。4輪駆動で最高時速は40km/h。

駆動方式は、2WSが標準で、4WSを選ぶと、全輪を同方向に向けるカニ歩きが可能になる。足回りには、ミシュラン製の「1050/50R32」のタイヤを履かせ、車幅は3.0mだ。後部には8tのけん引力がある連結装置を備える。



オランダで、この機体後部に最もよく装着されているのが、17,000ℓスラリータンクとそのインジェクタ（幅6.0m）だ。この他、荷降ろし機や容量50m<sup>3</sup>のサイレージ用トレーラなど多様な種類の機械を装着できる。オプションでチョッパと運搬車の兼用機にすることもできる。

ブレド社のVT運搬車は、圃場での様々な作業に幅広く利用できる。

## Yield monitor mania



農業での技術革新が世界に広まるのはあっという間だ。例として、コンバインの収量モニタを見てみよう。これが大学の研究プロジェクトの対象となったり、農機メーカーによって開発用の試作品が作られたりして、まだ10年も経っていない。それが今や、新型コンバインの多くに標準装備されている。

米国のパデュー大学の調査によれば、2000年から2002年の収穫期に世界で3万2500台強の収量モニタが利用されていることが明らかになっている。その内約90%が、米国のコンバインに設置されたもので、その数はおよそ3万台に及ぶ。

これが2003年の収穫期には、推計で4万5000台に急増したと見られる。

この数字の内訳を見てみると、トウモロコシ農家で収量モニタが最もよく導入されていて、全トウモロコシ農家の46%が利用して

## 普及が進む収量モニタ From U.S.A.



世界中で搭載される収量モニタの90%が米国で稼動するコンバインに装備されている。

いた。一方、小麦農家では、「収穫したその場で」収量をモニタしている農家は、わずか15%にとどまっている。



## Getting its act together 販売体制を整えるクラス社

From South Africa



クラス社は、南アフリカでトラクタ販売を過去何度も暫定的に行ってきたが、ついに最終的な販売戦略を決定したようだ。

当初、考えられていた販売網を新規開拓するという方法はとらず、以前からクラス製

品を取り扱っていた販売店との取引を継続する方針だ。さらに、クラスが買収したルノートラクタの販売も契約に含めるようだ。

クワズールナタール州ミッドランズで最近開かれた実演展示会では、クラストラクタの集団が同社サトウキビハーベスタをけん引

する様子が披露された。また、ブラウやカルチベータを装着した別モデルのトラクタも展示された。訪れた近隣の農家たちは、様々な機体を試乗していた。

地元のクラス販売代理店、NMF（ナタール・メカニズド・ファームिंग）社によるサトウキビハーベスタのセールスは上手くいき、このほかにも、コンバイン、飼料用機械、ペーラなどにも買い手がついた。



クラス社は南アフリカにおける販売戦略を決定した。既存販売店網を再編成する。

## Veggie harvester has velvet touch



オーストラリアで、新しいレタスなど葉物野菜用のハーベスタが開発された。この機体の核心部分は、円形の揺りかごの下に付くスキー場のリフトを連想させる作物搬送部だ。



収穫したレタスを揺りかご型の新しい装置が搬送する。この機械の導入で作物の損傷が減少したという。

## Big booms draw attention 長さに注目が集まるブームスプレーヤ

From U.S.A.



自走式やけん引式のブームスプレーヤの普及が広まりつつある。時間あたりの薬剤散布量を改善させたいと考えている農家があるからだ。

2004年に米国の農機業界で初めて、ジョンディア社が作業幅36mの自走式スプレーヤを販売したときは大きな話題となった。「4920」自走式ブームスプレーヤは、300馬力のエンジンを備え、タンク容量は4540ℓ。薬液の最大吐出量は、757ℓ/minという高性能機だった。

それから1年以上経過した米国では、36mの作業幅を持つけん引式のスプレーヤはすでに一般化しており、ファスト社、レッドポール社のほか、数社がタンク容量4540～7570ℓまでの各種スプレーヤを販売している。そのなかでも、レッドポール社の製品のブームが最長で、タンク容量7570ℓのモデル「690」は、作業幅40mに及ぶ。この

機体は時間当たり100ℓの薬剤を噴霧しながら時速13kmで走行でき、時間当たりの作業効率は50haになるという。



ジョンディア社製「4920」の登場は、自走式ブームスプレーヤ大型化の呼び水になった。

## Peat professionals



フィンランドでは昨年、夏の中盤から終わりにかけて豪雨があり、泥炭採掘作業が中断を余儀なくされた。そのため、5万4000haある採掘用地からの泥炭採掘量は2200万m<sup>3</sup>にとどまった。この数字は「残念なこと」にこの夏の目標採掘量の75%に過ぎない。

この国最大の採掘会社ヴァボ社では、4万6000haの用地からおよそ1800万m<sup>3</sup>の泥炭を採掘した。採掘作業は主に民間請負業者が行い、およそ2000台のトラクタと3500人の男女が作業に携わっている。請負業者のなかで最も大きいのは、フィンランド東南地方から来たペトリ・ジュシラ氏の経営する採掘請負会社だ。同氏の会社は1100haの泥炭採掘用地を割り当てられ、同社のさらに下の下請業者とともに採掘を行う。掘り出した泥炭は暖房や発電用の燃料として利用される。